

近代都市としての東京・横浜―源流と末流

担当教員：辻 英史・竹本研史

概要

日程：事前学習 2020 年 12 月～2021 年 3 月、現地訪問は 2021 年 3～4 月に実施。

場所：東京および横浜とその近郊

参加人数：9 名

コースのねらい

開国と明治維新以後に日本の近代が始まる。江戸から改名した東京は日本の首都となり、新たに開港した横浜は海外貿易の拠点として、ともにめざましい発展を遂げた。その過程で両市は人口が増加しただけでなく、公共建築、文化施設、道路・交通網、住宅地、生活インフラ、そして公園・緑地といった近代都市として必要なさまざまな装置を備えるに至った。

この両市の都市としての発展は、日本に先行して近代化をすすめるヨーロッパの各都市からの直接・間接の影響のもとに進められた。東京・横浜に代表される日本の都市は、いわばヨーロッパを源流とする近代都市の流れの末流に位置づけることができるのである。こうした近代都市として建設された当時の痕跡は、明治維新以後 150 年を経て、関東大震災や太平洋戦争での戦災、さらに高度経済成長やバブル経済を経験した現在にあっても、東京や横浜の街の随所に見出すことができる。

このフィールドスタディでは、参加者は、自分の興味がある都市のなかのさまざまな場所を訪れ、その場所が近代になって以降、現在までに経てきたさまざまな歴史的発展の産物であることを意識する。そして、その場所の歴史的背景について文献や資料を調査し、レポートを執筆する。その作業を通じて、自分が見てきた場所や、あるいは見慣れていたはずの街の日常の風景が、じつは長い歴史の結果つくり出されたものであり、そこには多くの人物や事件が関与していたことを認識することになる。その結果、歴史的な連続性を踏まえて現在や未来を展望することの重要性に気がつくだろう。

内 容

参加者は、事前学習で東京や横浜の全般的な発展について知識を得たのち、自分でテーマを設定して、それに関連する場所や施設を選んで訪問した。その後で事後学習として訪問場所の歴史的な由来や沿革に関する文献資料をさらに調査し、テーマに関する考察を深めてレポートとしてまとめた。

選んだテーマの例

- 横浜と湘南地域の近代建築
- 日本における西洋式庭園について
- 東京都内のキリスト教会
- 郊外の住宅地開発～田園都市と学園都市
- 東京大空襲の記念碑・追悼碑
- 演劇の街としての渋谷と下北沢
- カスリーン台風と令和元年東日本台風の比較による利根川と荒川の水害対策

学習を終えて

本 FS の調査に当たって、東京大空襲・戦災資料センターを訪れ東京大空襲の仮埋葬地図を眺めていた時の事である。ふと自分の家(荒川区西日暮里)がある方角に目をやると、まず一番に膨大な人数が埋葬された上野公園・谷中霊園に目が行き、その周りに埋葬数が少ない小規模な仮埋葬地が点在していた。そしてその内の数か所は自身が通っていた小学校のすぐ近くにある事が分かり、後日近辺を訪れた。しかし、恐らく当地であると思われる地点を搜索してもそれらしき表示はなく、全く分からなかった。帰宅後、検索エンジンにて詳細に調べたところ、なんと幼少期によく遊んでいた公園、そして近場の遊園地が仮埋葬地であったことを知った。その後に碑を調べ、その役割について考察するうちに、自分が訪れたかつての仮埋葬地は碑文の言葉を借りるならば、「平和な繁栄のもとに忘れ去られた歴史」なのだと感じた。

今回の FS では戦後 76 年を経て、当時を語る人が減っていく中で、代わりに人々の思いを伝えるモニュメントの重要性とその意味を確かめることが出来たと思う。

(4 年・坂田 勲亮)



